

Children's Houseworks in Thailand

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/375

タイ国における児童生徒の家庭内労働 —— ラーオ族とカレン族の比較調査 ——

佐川 哲也・国土 将平*・笠井 直美**・大澤 清二***

Children's Houseworks in Thailand Comparative Survey between Lao and Karen Children

Tetsuya SAGAWA, Shohei KOKUDO*, Naomi KASAI**, Seiji OSAWA***

はじめに

児童生徒の家庭内労働は単に両親のいわゆる「お手伝い」に止まらず、同じ屋根の下で暮らす家族の一員としての役割労働分担と位置づけることができる。また、両親の監督下で行われるこうした活動は生活技術を親から子へと伝える文化伝達機能を内包した家庭教育とも捉えることができる。家庭内労働はその人々が暮らす社会・文化・経済状況によって様ではない。生活の都市化・近代化が進んだ地域では、家庭内の労働そのものが軽減され、子どもが受け持つべき家事労働も減少する傾向にある。また、居住地域や生業労働・家族構成等によっても大きく異なっている。伝統的生活様式を色濃く残した地域における家庭内労働は民族学・民俗学的にも大変興味深い活動である。

筆者らは1990年1月にタイ国東北部ウボンラーチャターニ県において、同県の都市部と農村部の小・中学生を対象とした「家庭内労働に関する調査」を実施している¹⁾。標本数1,302人のこの調査では調理、掃除、お使い・買い物、水汲み、畑仕事、家畜の世話の項目からなる家庭内労働について分析を行い次のような結果を導いている。

- ①ひとり当たりの家庭内労働の総量は加齢にとまって増大する。
- ②加齢にとまって性差による役割の分化が生じる。男子に優位な家庭内労働は家畜の世話、畑仕事、お使い・買い物であり、女子に優位

な家庭内労働は掃除、調理及び水汲みであった。

- ③都市部と農村部では家庭内労働に差が見られる。その主な原因は生業労働の違いや生活の都市化水準の差によって引き起こされたものと推察された。

本研究では1990年の調査結果を踏まえつつ、次の点を考慮して再調査を実施した。

- ①できるだけ多くの家庭内労働が把握できるように家庭内労働の項目を増やす。
- ②家庭内労働の実施時間帯を朝と夕方に分けて調査分析する。
- ③家庭内労働は民族や居住地域によって異なると予想されるため、異なる民族についても調査して比較分析を行う。本研究では新たにタイ国北部チェンマイ県の山岳地帯をフィールドに加えることができたので、そこに居住する山岳少数民族のカレン族を対象とした。
- ④家庭内労働は子どもの一日の生活にとって重要な活動であり、かなりの時間を要する活動であるから、生活時間などに関連させて分析を行う。

すなわち、本研究の目的はタイ国東北部農村のラーオ(Lao)族とタイ国北部山岳地のカレン(Karen)族における児童生徒の朝及び夕方の家庭内労働の実施状況を彼らの生活と関連させながら明らかにすることである。

I. 方法

1. 調査内容

本研究では先の調査を踏まえつつ児童生徒の家庭内労働を次の11項目から捉えた。

- ①食事の用意
- ②食事の後片づけ
- ③家内の掃除
- ④洗濯・アイロンがけ
- ⑤買い物
- ⑥店の番
- ⑦弟妹の世話
- ⑧水汲み
- ⑨家畜の世話
- ⑩菜園の世話
- ⑪その他

ただし、「⑥店の番」はすべての家庭が商店を営んでいるわけではないので分析の対象から除外した。また、「⑪その他」についても回答率は低く特記すべき内容はないと判断されたので分析の対象外とした。

基本的生活項目として、就寝時刻、起床時刻、兄弟の数、1か月の小遣いについて取り上げた。質問紙はタイ語にて作成した。

2. 調査方法及び標本数

調査は1995年12月に調査対象校を訪れ、各教室で一斉に実施し回収した。また、不明点は各教室担任教師の協力を得ながら記入漏れ等がないように配慮した。

調査は東北タイでは対象校の小学校4年生から中学校3年生のすべての児童生徒を対象に、

また、北タイでは小学校3年生から中学校3年生までのすべての児童生徒を対象とした。北タイの小学校ではすべての児童生徒を対象として調査を実施したが、本報告ではカレン族のみを対象として分析を実施した。この分析に用いた標本数は表1に示すとおりである。タイの学校では家庭の事情等によって小学校入学年齢が異なる場合があるので年齢別に示した。その結果8歳の児童が2名含まれていたので9歳と同じカテゴリーにして8-9歳とした。また、16歳の生徒1名が含まれていたので15歳と同じカテゴリーにして15-16歳とした。

II. 調査対象地域と生活

1. 東北タイ農村のラーオ族

調査対象校として選定されたノンガンホーイ村小・中学校は、タイ国ウボンラーチャターニ県デッウドム郡ノンガンホーイ村に位置する。この村は東北地域で最も一般的な純農村のひとつである。東北部はコーラート高原と呼ばれる高原地帯で天水を頼りにして農業を営む農民がその殆どを占める農業地帯である。しかし、高原に降る雨は降らなければ旱魃、降れば洪水と決して農業には適した地域ではなく、そのためこの地域は不安定な農業収入のためにタイで最も貧しい地域となっている。そのため、農業の近代化が遅れ、今日もなお伝統的生活様式が色濃く残っている地域である。ここに居住する住民の殆どはラーオ族である。ラーオ族はシャム族と並んでタイ・ノイーに属するタイ族であり、人種的にはシャム族と最も近い関係にある

表1 標本数

年齢	8-9	10	11	12	13	14	15-16	計
ノンガンホーイ村小・中学校	0	17	31	26	23	26	29	152
ラーオ族／男子	0	5	14	11	12	7	8	57
ラーオ族／女子	0	12	17	15	11	19	21	95
ボケオ村小・中学校	17	12	18	19	19	13	8	106
カレン族／男子	5	2	9	7	8	4	3	38
カレン族／女子	12	10	9	12	11	9	5	68
計	17	29	49	45	42	39	37	258

亜民族とでも呼ぶべきタイ族のグループである²⁾。タイ政府は人種別統計においてラオ族というカテゴリーは使用せずすべてタイ族として扱っている³⁾が、本研究では当該地域が民俗的伝統を多く残している地域であり、敢えてラーオ族と呼ぶことにした。

ノーンガンホイ村は県庁長所在地のウボンラーチャターニ市から郡役所所在地のあるデッドムを経て約1時間30分程度の距離にある。国道23号線というウボン市からバンコク都へ通じる幹線道路から約3キロメートル程入ったところに位置する。村内には約180世帯が居住していて人口は1,000人を優に超える。村人の殆どが東北地方出身のラーオ族である。村人の殆どが農業に従事し、主に稲を栽培している。村は既に電化され、かなりの家庭にテレビが浸透しつつある。1995年現在で商店が5軒、簡易のガソリンスタンド4カ所、オートバイを改良したスカイラブと呼ばれる三輪を含む自動車は全部で14台である。

今回の調査で得た兄弟の数は4.7人であり、1か月の小遣いは10-12歳の平均で54.4バーツ、13-15歳の平均で158.0バーツであった。

2. 北部山岳地のカレン族

調査対象地として選定されたカレン族の学校は、タイ国北部チェンマイ県サムーン郡ボケオ村のボケオ村小・中学校である。チェンマイ市からボケオ村へはチェンマイ市の北にあるメーリム郡を経て途中標高1,000メートルを超える山を超えてサムーンの盆地に約1時間半を要して一旦降り、そこから更に西へ向かって山道をジープで1時間程上った山の中腹にある。ボケオとは「宝の井戸」を意味する言葉で、かつて大きな錫の鉱山があった。その鉱山が村名の由来である。鉱山のあった名残で学校のあるボケオ村にはタイ族が暮らしているが、周辺にはカレン族やメオ族の集落があり、近くのサンパトゥー村などからカレン族の児童生徒が約1時間程度かけて徒歩で通ってくる。カレン族はミャンマーからタイ国北部の山岳地帯に住む山

岳少数民族であるが、タイ国政府のタイ化政策の中で現在では定住してタイ国民として暮らしている。元々焼き畑をして生活していた山岳少数民族カレン族の生活水準は低く、家財道具も少ない。彼らは急峻な山の斜面にタロ芋や陸稻、雑穀などを栽培して細々と生活している。サンパトゥー村には電気が来ているが、テレビを所有する家はそれほど多くない。

今回の調査で得た兄弟の数は3.8人であり、1か月の小遣いは8~12歳の平均で111.2バーツ、13~16歳の平均で118.7バーツであった。

III. 家庭内労働の実態

得られた資料から9項目の家庭内労働について民族別、時間帯別、男女別、年齢別に分析を試みた。なお、年齢集団は10-12歳の小学校高学年集団と13-16歳の中学生集団の2集団に整理したものを分析の対象とした。図1~4は横軸に男子の家庭内労働実施率、縦軸に女子の家庭内労働実施率を示しており、布置された点が右方にあればあるほど男子の実施率が高いことを、点が上方にあればあるほど女子の実施率が高いことを示している。また、両軸を分ける対角線は男子と女子の割合が等しい点を結んだ線分であり、対角線の下方は男子に偏っていることを逆に上方は女子に偏っていることを示している。また、対角線から離れるほどどちらかの性に家庭内労働の実施率が偏っていることを示している。さらに、布置された同民族・同性・同時時間帯の2つの年齢集団をひとつの線分で結んでいる。○印及び□印が10-12歳の集団を、△印は13-16歳の集団を示している。

1. 食事の用意

ラーオ族小学校高学年生の朝の「食事の用意」の実施率は男女とも約50%の値を示しているが、中学生になると男子の値は変わらずに女子の値が76.5%と大きくなっており、特に女子に優位な労働とる。この傾向は夕方でも同様の傾向で、小学校高学年生の女子の値が朝に比べて36.4%とやや低い値を示したものの中学生女子

で80.4%となり、女子に優位な労働となっている。

カレン族の場合もラーオ族と同様に小学校高学年生では朝夕とも男子は40~50%女子は30%強であったものが、中学生では女子の実施率が大きくなり女子に優位な活動となった。中学生では朝は男子の実施率が小学校高学年生を下回ったのに対して、夕方では男子の割合も僅かに増加し、中学生男子では朝と夕の実施率に大きな差ができた。

この「食事の用意」という家庭内労働は両民族とも男女とも35%を超える比較的高い実施率であり、かつ中学生女子にとっては非常に高い

実施率となっており、中学生女子が「食事の用意」という家庭内労働を非常に高い割合で分担していることが明らかとなった。

このことはタイの中学生女子がかなり高いレベルの調理の技術を身につけていることを推察させる。彼女たちの今日の初婚年齢について知る資料を持ち合わせていないので詳しくは言及できないが、小学校高学年生の実施率もかなり高く、早い時期から調理の経験があり、調理技術を習得しているものと推察される。また、単に母親の手伝いだけではなく、特に農繁期時には自らが調理のすべてを行うということが聞き取り等の調査によって分かっている。男子の

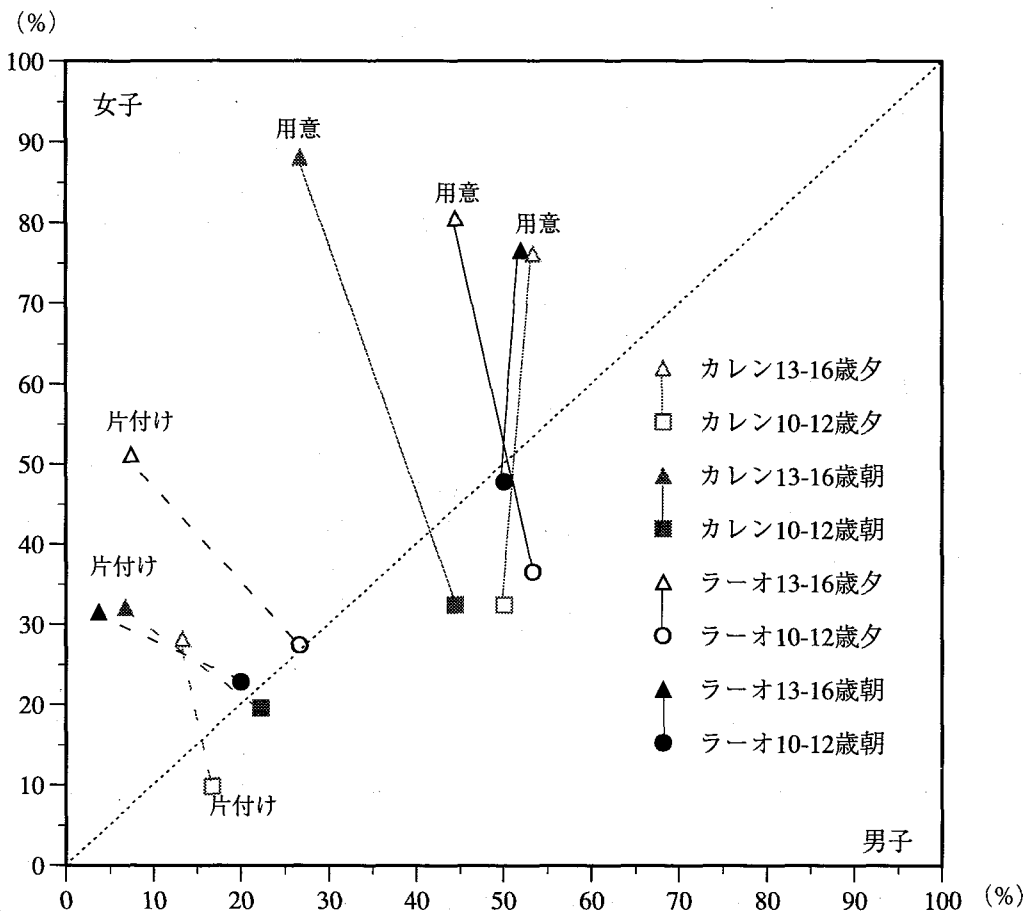


図1 食事の用意・後片づけ

実施率についてもかなり高い値を示しており、男子もかなりの調理技術を身につけているものと推察される。

2. 食事の後片づけ

ラーオ族の「食事の後片づけ」の実施状況を見ると、小学校高学年生では男女ともほぼ同じ値を示しているが、20～30%前後とその実施率は「食事の用意」と比較して低い値に止まっている。中学生になると男子の実施率が大きく減少してY軸にかなり接近するが女子は実施率が高くなり朝では31.4%夕方には51.0%に達し、女子に優位な傾向が顕著となる。しかし、「食事の用意」に比較すると低い実施率である。

カレン族の「食事の後片づけ」の状況は朝はラーオ族の状況とほぼ同じ傾向で、小学校高学年生では男女とも約20%強であったものが、中学生になると男子の実施率が減少して女子の実施率が増加する。夕方の状況は小学校高学年生では男子16.7%女子9.7%から、逆に中学生になると男子の値は13.3%へと減少し、女子は増加して28.0%となった。

「食事の後片づけ」は「食事の用意」と同様に中学生になって女子に優位な労働となったことに加え、男子の実施率が減少したことがひとつの特徴となっている。また、「食事の用意」に比較すると全般的に実施率が低くなっているこ

とも大きな特徴と言える。この理由は、食事内容に見つけることができよう。ラーオ族の農村ではもち米を主食としており、これをスープや炒めものの野菜類などにひたして食べるのが一般的である。もち米はカティプと呼ばれる竹を編んで作ったかごに入れてあるので皿は使用しない(写真1参照)。またおかずの類も個人ごとに取り分けることはせず、全員分を一皿に盛る。つまり、一回の食事に使う皿の数が極めて少ないということである。また、蒸したもち米もおかずも残ったものはそのまま次の食事にとっておいて再び食すという傾向が強く、場合によっては皿は1枚も空かないというケースも予想される。

また、カレン族の場合は現地で観察聞き取り調査をした限りでは陸稲の他に雑穀の類を主食としており、惣菜の類は動物タンパクは少なくタロ芋や根菜の類が多い。したがってラーオ族の場合と同様、後片づけをすべき食器類は極めて少ないのが実情であると思われる。

つまり、彼らの食事においては用意の段階では時間を要するものの、できてしまえば皿はほんの数枚しか使わず後片づけをするべきものはほとんどないと言える。また、残飯となっても犬や猫の餌となって、後片付け自体の仕事がほとんどない食事のスタイルであると解釈され

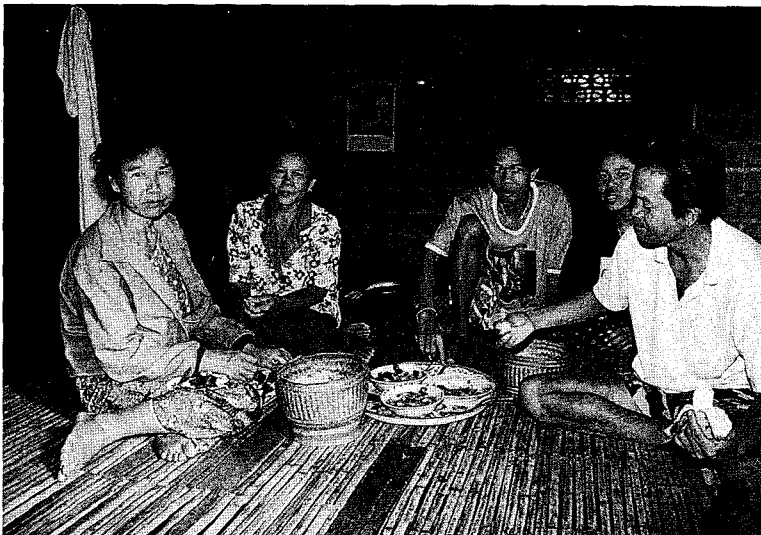


写真1 ラーオ族の食事風景

る。

3. 家内の掃除

ラーオ族の農村でよく見られる家屋は杭上家屋で階下を物置や家畜小屋として利用している場合が多い。階上部分はやや広い板の間と狭い夫婦のための板張りの寝室をとまっているのが一般的である。広間は生活の中心になる空間であるが、4面すべてを板で覆って壁にしている家もあれば、壁を作らずにオープンにしている家屋もある。また、階上の隅の方に狭い台所と小さな食器棚がある。杭上家屋でない家は、1階部分のすべて板又は煉瓦やブロックで壁を作り空間を作り出している。こうした家屋の

場合は殆ど2階建てとなっており、2階が寝室1階が居間として利用している場合が多い。このような家屋における子どもに与えられる家庭内労働としての「家の掃除」とは居間の掃き掃除と家財道具の整頓である。ちなみに家財道具の種類や数は決して多くなく。衣類や寝具の類も必要最小限で驚くほど少ない。

図2は「家内の掃除」を示している。ラーオ族の朝の状況は小学校高学年生では男女とも60%を超えてほぼ等しい実施率であるが、中学生になると男子の実施率が僅かながら減少し、逆に女子の実施率は大きく増大して86.3%に達し女子に優位な労働となる。夕方の実施状況で

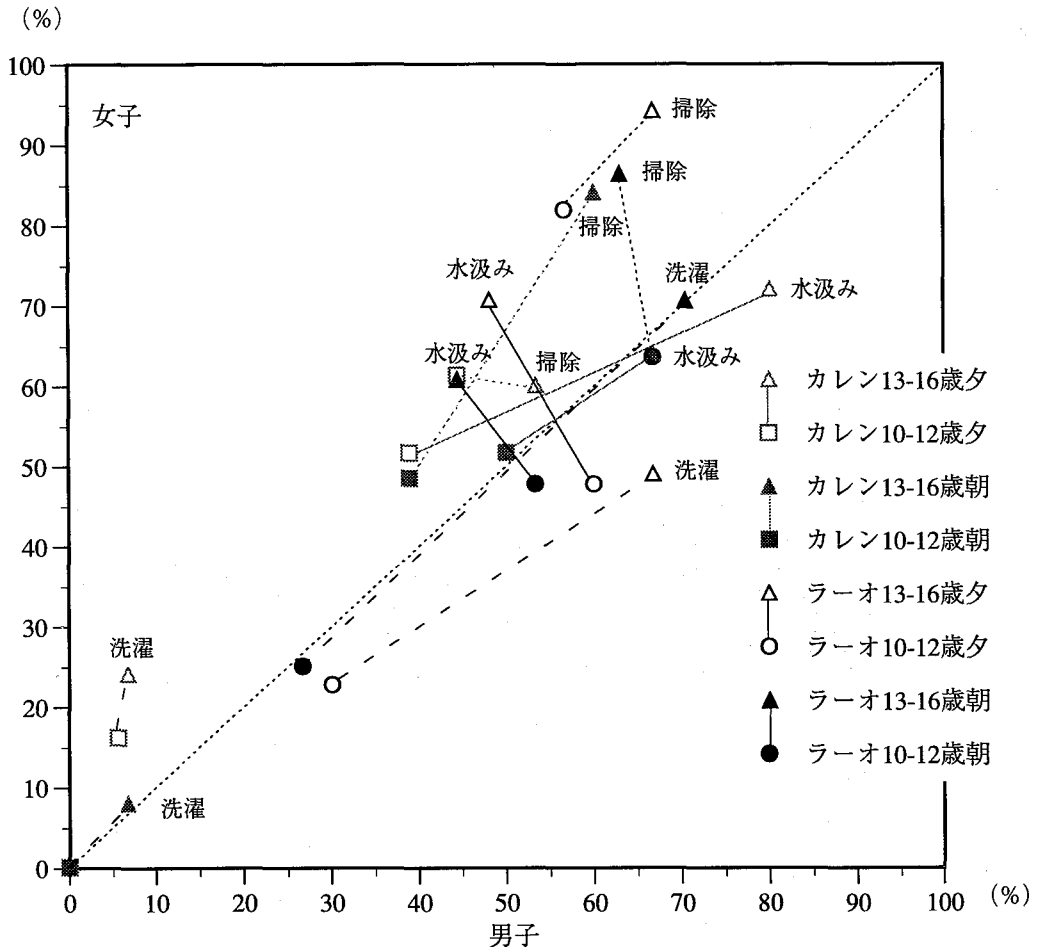


図2 家の掃除、水汲み、洗濯・アイロンがけ

は小学校高学年生男子が56.7%、女子81.8%と女子が男子を約25%上回っている。中学生では男子が66.7%女子が94.1%とやはり女子が25%以上上回って優位である。しかも女子のこの値は両方の民族を合わせたすべての家庭内労働の中で最も高い。

カレン族の家屋は木造の杭上家屋が一般的であるが、ラーオ族の家屋に比べると階が低く家屋自身もやや小さい。階下部分には豚が放し飼いにされていて衛生状況は悪い。

カレン族の朝の「家内の掃除」は小学校高学年生男子の値は38.9%とラーオ族の半分近くである。女子では48.4%で男子よりも若干高くなり、女子に優位な傾向を示している。中学生になると男女とも実施率が大きく増大して男子では60.0%、女子で84.0%となる。夕方では小学校高学年生は男子44.4%女子61.3%であるが、中学生になると男子は53.3%に増大するが、女子は60.0%に僅かだが減少する。この傾向はラーオ族の朝夕やカレン族の朝の傾向と異なるものであるが、依然女子に優位な活動となっていることには変わりない。

以上のことから「家の掃除」はラーオ族の小学校高学年生を除いてすべて女子が男子を上回っており、女子に優位な家庭内労働となっていることが明らかとなった。また、カレン族の夕方の実施率を除いて80%以上という非常に高い割合を示した。

4. 水汲み

ラーオ族の「水汲み」の状況を見ると小学校高学年生では朝・夕とも男子の実施率がやや女子を上回っており、どちらかという男子に優位な活動となっているが、中学生になると男子の実施率が減少するとともに女子の実施率が大きく増大して女子に優位な活動となる。

ところがカレン族では小学校高学年ではやや女子の実施率が男子を上回って女子に優位な労働となっているが、中学生になると男女とも大きく実施率が増大するが女子の実施率を男子がはるかに上回ってどちらかという男子に優位

な労働となる。例えば中学生の夕方で見ると女子は72.0%であるのに対して男子は80.0%と非常に高い割合を示す。

この水汲みについてはラーオ族とカレン族の小学校高学年生と中学生の間で全く逆の結果となった。つまり、ラーオ族では小学校高学年生では男子に優位であった労働が中学生で女子に優位な労働となり、カレン族では小学校高学年生で女子に優位であった活動が中学生では男子に優位な労働となった。この解釈をめぐっては現地での詳細な調査が必要であるが、おそらくは水汲み場と家の距離の差に起因しているものと予想される。つまり、ラーオ族の場合は平地に住んでいるため井戸が家の近くにあるが、カレン族の場合は山地に住んでおり井戸というよりもむしろ近くの小川まで行って水を汲んでいるのではないかと想像される。「水汲み」によって運ばれた水は主に水浴びや洗濯等に使用されるので大量に必要となり、毎日大家族分の水を運ぶとなると大変な重労働となる。「水汲み」が重労働になればなるほど遠くまで出かけていくことはなお一層困難さが増す。したがって、カレン族の「水汲み」が急傾斜地を川まで行くということになればそれが男子に優位な労働となることは説明がつくかもしれない。ちなみにラーオ族もカレン族も飲料水には雨季に溜めた雨水を利用している。

5. 洗濯・アイロンがけ

この項目は「洗濯物を洗う、洗濯物を干す、アイロンをかける」の3つの労働をひとまとめにした項目である。

ラーオ族の小学校高学年生は朝夕・男女とも20~30%の値を示しているが、中学生になると男女とも実施率が増大して朝では男女とも70%を超える。夕方では朝同様男女とも実施率が増大するが、男子66.7%女子49.0%と男子の割合が女子を上回って男子に優位な労働となる。何れにしても衣服の「洗濯・アイロンがけ」はラーオ族の児童生徒にとってはかなり一般的な家庭内労働であり、中学生ではその実施率は高いと

言える。

カレン族はラーオ族とは全く異なる傾向を示した。つまり、実施率が極めて低いという結果であった。小学校高学年生よりは中学生の値が若干高くなっているが依然として低い実施率である。朝と夕方と比較すると若干夕方の実施率が高くしかも女子に優位な労働となっているもののラーオ族の比ではない。この原因は衣類の数の差ということも考えられるが、ラーオ族の衣類の所有率も決して高いものではなく、これほどの差となって表れるとは考えにくい。それよりも気温の差であると考えた方が妥当であろう。ボケオ村の標高は約1,100メートルで更に高

い場所にあるサンパトゥー村ではさらに気温は低いと予想される。直接現地で気温の測定を実施していないので正確な数値ではないが、12月30日のチェンマイ市の予想最低気温は摂氏11度であり⁴⁾、チェンマイ市の標高が約300メートルであることからすると、低く見積もったとしてもカレン族の暮らす山間地域の気温は摂氏10度を大きく下回っていることは確実と思われる。また、予想最高気温摂氏26度から推測すると現地では日中摂氏20度前後までしか気温は上昇しないと推察される。この調査の当日、ボケオ小学校では寒い教室での授業を避けて校庭へ椅子を持ち出して、日向で授業をする光景を目にし

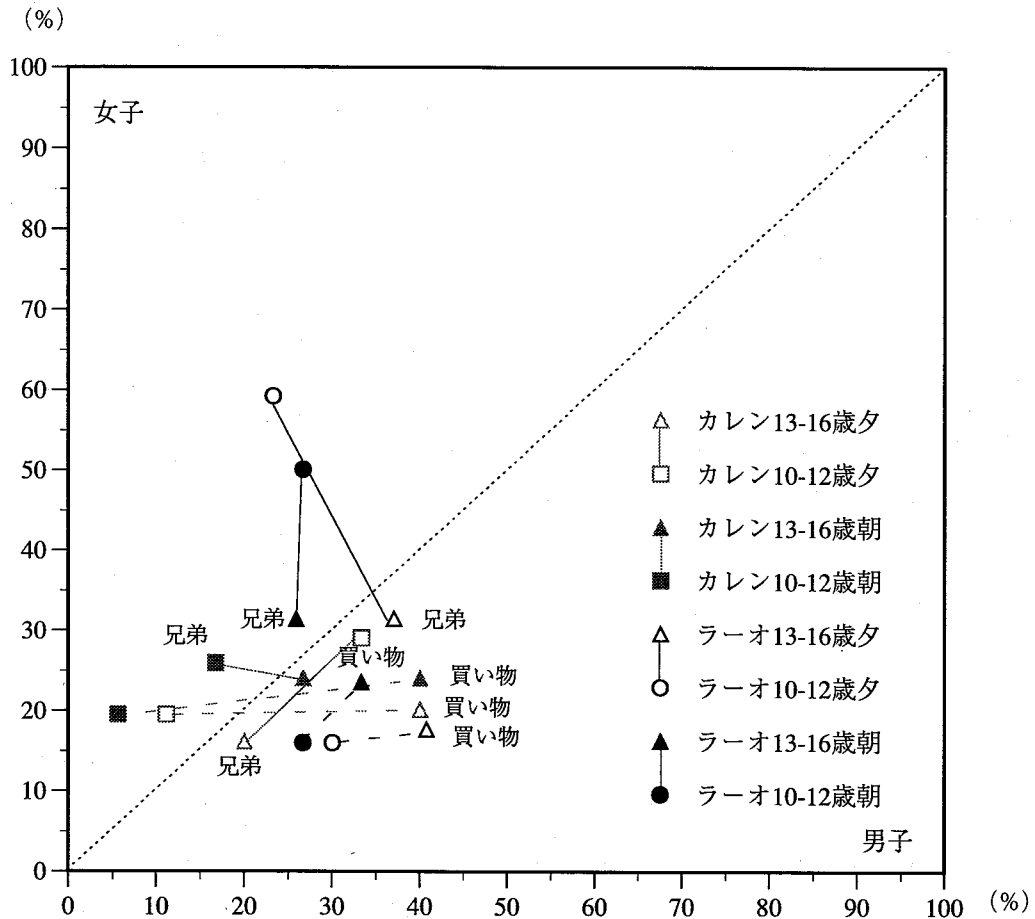


図3 弟妹の世話, 買い物

た。このような条件下では発汗量も少なく、気温の低い冬期には毎日洗濯していないものと思される。

6. 弟妹の世話

ラーオ族の朝の小学校高学年生の「弟妹の世話」の状況は、男子26.7%女子50.0%と女子に優位な労働になっている。夕方では男子23.3%女子59.1%とやはり女子に優位な労働となっていて朝夕とも女子の実施率はかなり高い。中学生になると女子の実施率が大きく減少して、男子との差がほとんどなくなる。夕方だけをみると男子の実施率は小学校高学年生をむしろ上回って若干男子に優位な活動とみることができる。

カレン族の朝の状況は小学校高学年生では男子16.7%女子25.8%でラーオ族と比較すると低い割合となっている。中学生になると女子の割合はやや減少するが男子の割合がやや増加して男子26.7%女子24.0%となる。また、夕方では小学校高学年生の男子33.3%女子29.0%が、中学生では実施率が減少して男子では20.0%女子16.0%となり、小学校高学年生が中学生より優位な活動となっている。

この小学校高学年生が中学生を上回るという傾向は両民族とも女子に顕著に表れており、「弟妹の世話」は加齢とともに減少していく役割

労働となっていることが明らかとなった。

7. 買い物

ラーオ族の朝の「買い物」の状況は小学校高学年生では朝夕とも男子の実施率が女子を上回って男子に優位な活動となっている。夕方の実施率は男子30.0%女子15.9%である。中学生では朝は男女とも実施率が増大して男子33.3%女子23.5%でありやはり男子に優位な労働であることは変わらない。また、夕方では男子のみ実施率が増大して40.7%となり、更に男子優位の傾向が強まる。

カレン族では朝夕とも小学校高学年生では女子に優位な活動となっているが中学生になると男子の実施率が顕著に増大して明らかに男子優位の労働となる。ちなみに夕方の男子の実施率は女子が20.0%であるのに対して2倍の40.0%である。

両民族の結果から小学校高学年生ではカレン族で女子に優位な結果であったが、中学生では男子に優位な結果となった。これは外へ出かけていくという活動は男子の役割であるということを示唆する結果である。特に、カレン族居住地域である山岳地帯には様々な部族が混在して生活しており、女子をそうした他の部族と接触する可能性のある労働には行かせないという意図があるのではないかと思われるからである。

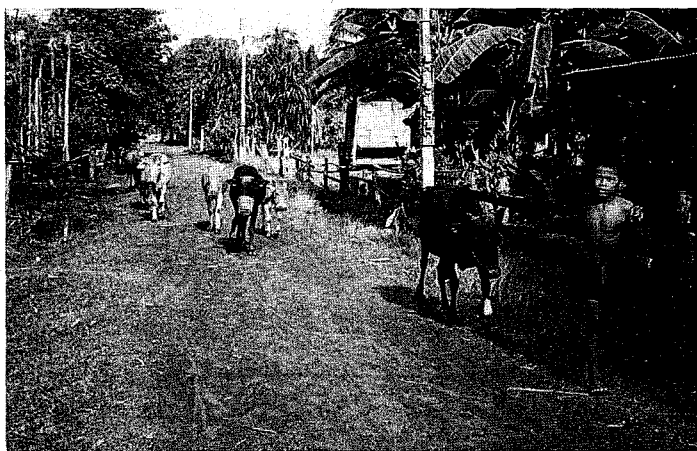


写真2 家畜の世話をするラーオ族の少年

8. 家畜の世話

ラーオ族の農家では水牛、牛、鶏、アヒルなどのを家畜として飼っている。特に水牛は重要な家畜で、田植え前の田起こしや畑の耕作にはなくてはならない役牛となっている。しかし、大型の家畜は沢山の餌を必要とし、その餌の調達が農家にとって大変な労働となっている。そのため毎朝餌場まで水牛や牛を連れて行き、夕方には連れ戻るという労働が必要となる(写真2)。鶏やアヒルに対する世話は餌となる飼料を撒き与える程度で労働という程の活動には当たらないが、回答者の中には当然「家畜の世話」としてカウントしていると解釈すべきである。

ラーオ族の児童生徒の「家畜の世話」の状況をみると、小学校高学年生では朝は男子に優位な労働、夕方は女子に優位な活動となっている。中学生になると男子の実施率が顕著に増大して朝では40.7%夕方では48.1%となり、はっきりと男子に優位な活動となる。

カレン族にとっての家畜は豚、鶏、アヒルなどである。中でも豚は彼らの生活にはなくてはならない存在で、祝い事の席で供されるほか、重要な換金動物である。豚の餌は主に穀類やパイアの実、バナナの幼茎類で、敷地内で放し飼いしているが、水牛などのように豚を外へ連れ出すことはない。

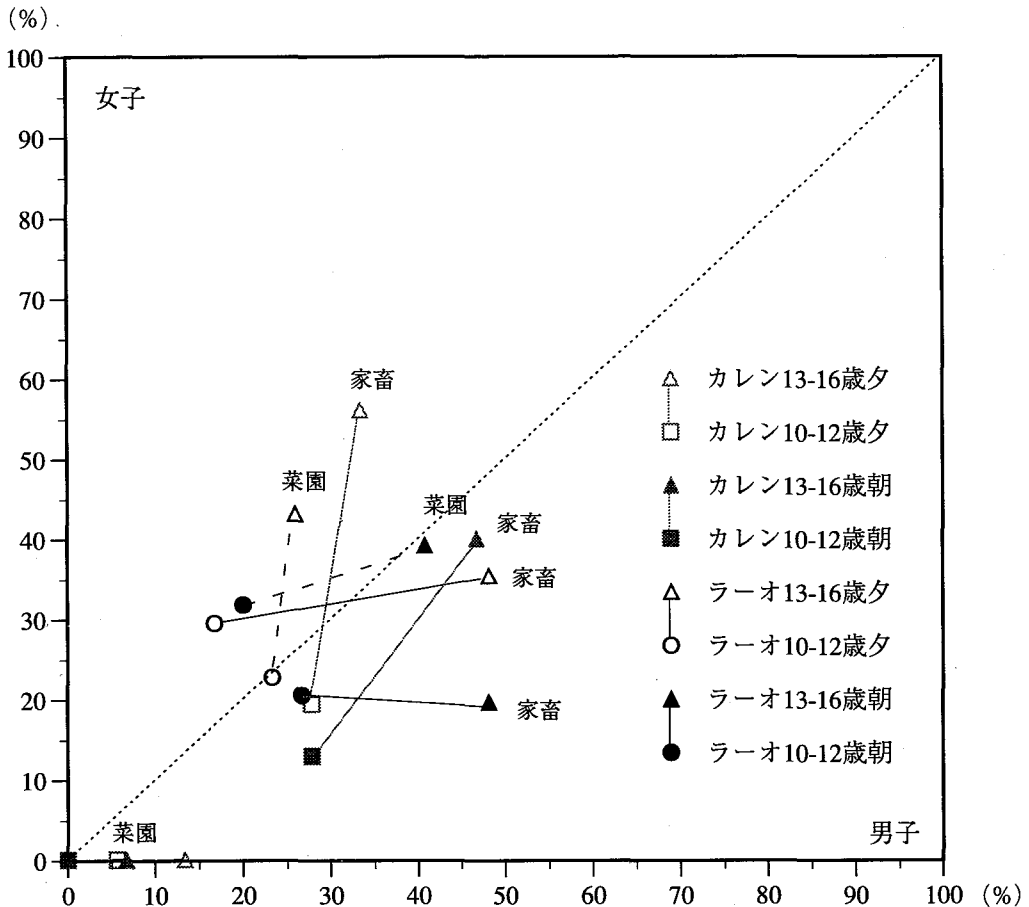


図4 家畜の世話, 菜園の世話

カレン族の小学校高学年生の朝夕の「家畜の世話」の状況は、男子の実施率が女子をやや上回っていて男子に優位な活動となっているが、30%弱とあまり高い割合にはなっていない。しかし、中学生になると朝は男女とも実施率が上昇して男子で46.7%女子で40.0%となり、やや男子に優位な労働となる。夕方では特に女子の実施率が伸びて56.0%となるが男子は33.3%と殆ど伸びず女子に優位な活動に転じる。

ラーオ族の「家畜の世話」は草を食べる水牛や牛であるために遠くまで出かけて行かねばならず、男子に優位な活動となったと解釈されるが、カレン族では穀類を食べる豚のために男女の別を特に問わない結果となったと推察される。

9. 菜園の世話

菜園とは家屋の周囲に作られた家庭用の菜園のことを意図しているが、回答者の中には畑に出かけて行って行う両親の補助的作業を含めた者もいるかもしれない。

ラーオ族の「菜園の世話」の状況は朝では小学校高学年生は男子20.0%女子31.8%と女子に優位な労働となっているが、中学生になると男子の実施率が女子の実施率をやや迫り越してほぼ等しい実施率となった。夕方では小学校高学年生は男女とも20%強でほぼ等しい実施率であったが、中学生では女子の実施率が大きく増大して女子に優位な労働となった。ちなみにその実施率は男子25.9%女子43.1%である。

一方のカレン族では男子の実施率がほんの僅かあるものの女子の実施率は完全に0%でカレン族は子どもの家庭内労働としての菜園での作業はないことが明らかとなった。

IV. 考察

1. 労働の数と生活時間

表2は朝及び夕方の家庭内労働の実施数を示したものである。年齢を比較すると、両民族・両時間帯とも13-16歳が10-12歳をすべて上回った。つまり、10歳から15-6歳では加齢とともに

表2 家庭内労働の実施数

朝		ラーオ族		カレン族	
		平均	SD	平均	SD
男子	10-12歳	3.17	1.97	2.06	1.21
	13-16歳	3.81	1.94	2.87	1.77
女子	10-12歳	3.25	1.94	2.10	1.25
	13-16歳	4.39	1.54	3.64	1.68
夕方		平均	SD	平均	SD
男子	10-12歳	3.20	1.79	2.33	1.19
	13-16歳	3.85	2.07	3.13	1.96
女子	10-12歳	3.43	1.99	2.39	1.65
	13-16歳	4.73	1.64	3.52	1.71

家庭内労働の実施数は増加することが明らかとなった。男女を比較すると、両民族・両時間帯とも女子が男子を上回っており、家庭内労働の実施数だけをいうと女子の方が数多くの家庭内労働を行っていることが明らかとなった。また、朝と夕方と比較するとカレン族の女子13-16歳を除くすべての間で夕方の実施率が朝の実施率を上回る結果となった。更に、カレン族とラーオ族を比較するとすべての組み合わせでラーオ族がカレン族の実施数を上回った。

標本中最も家庭内労働の実施数が多かったのはラーオ族の女子13-15歳の夕方の労働で平均4.73もの労働を実施しており、カレン族女子13-16歳の夕方の実施率3.52、ラーオ族男子13-15歳の夕方の3.85と比較するとその実施率の多さが一層はっきりとする。ラーオ族女子13-15歳は朝の時間帯でも各集団中最も実施数が多く、4.39を示している。図5はラーオ族女子13-15歳の朝夕の家庭内労働の実施率を示したものである。実施頻度の多い順に見ていくと「家の掃除」が最も多く、「食事の用意」、「洗濯・アイロン」、「水汲み」と続いている。この順位は朝夕を問わず同じ順位になっている。特に「家の掃除」、「食事の用意」、「洗濯・アイロン」は朝夕とも70%を超えて殆どの者が実施する三大労働となっており、習慣化していると言えるの

ではなかろうか。しかも4.73という数字は平均値であり、ラーオ族の女子13-15歳の夕方の度数分布に注目すると、「4種類」が最も多く29.4%次いで「5種類」23.5%、「6種類」17.6%と続きすべての労働を行ったと回答した者もいる。この結果はラーオ族の中学生女子が如何に多くの家庭内労働をこなしているかを示している。同時に彼らの生活は結構忙しいのではないかという疑問が浮かんでくる。そこで彼らの生活時間について見ることにする。

表3は起床時刻と就寝時刻を示したものである。ラーオ族の女子14歳に注目すると、午後10時4分に寝て、午前5時41分に起床している。この起床時刻はカレン族のどの集団よりもラーオ族のどの集団よりも早い起床である。しかも11歳の女子と比較すると就寝時刻の遅れは9分であるが、起床時刻の差がそれを上回る21分となった。つまり、睡眠時間の短縮が就寝時刻の変化よりも起床時刻の変化の影響をより強く受けており、同地域の都市化水準が非常に低いこ

とを示す結果となっている⁵⁾。農村的生活時間と子どもの家庭内労働との関係は、子どもの家庭内労働の多さが早い時間帯の起床時刻を要求した結果と推察されよう。つまり、ラーオ族の14歳の女子生徒に見るように多くの家庭内労働を抱えていることが早起きを要求していると思われるからである。「農村の生活は日の出とともに始まる」と伝統農村の生活を表現した言葉があるが、そうした朝早い生活の「食事の用意」を76.5%の者が行っていると回答しているであり、当然早く起きることが要求されていると解釈されよう。

カレン族の生活時間の変化はラーオ族の変化を大きく上回っている。女子について見ると11歳と14歳の就寝時刻の差は37分、起床時刻の差は50分である。男子では就寝時刻の差はむしろ14歳で6分早くなっているが、起床時刻は31分の差がある。この結果は先にラーオ族の女子で見たとおり、睡眠時間の短縮に及ぼす起床時刻の変化が就寝時刻の変化を大きく上回った結果

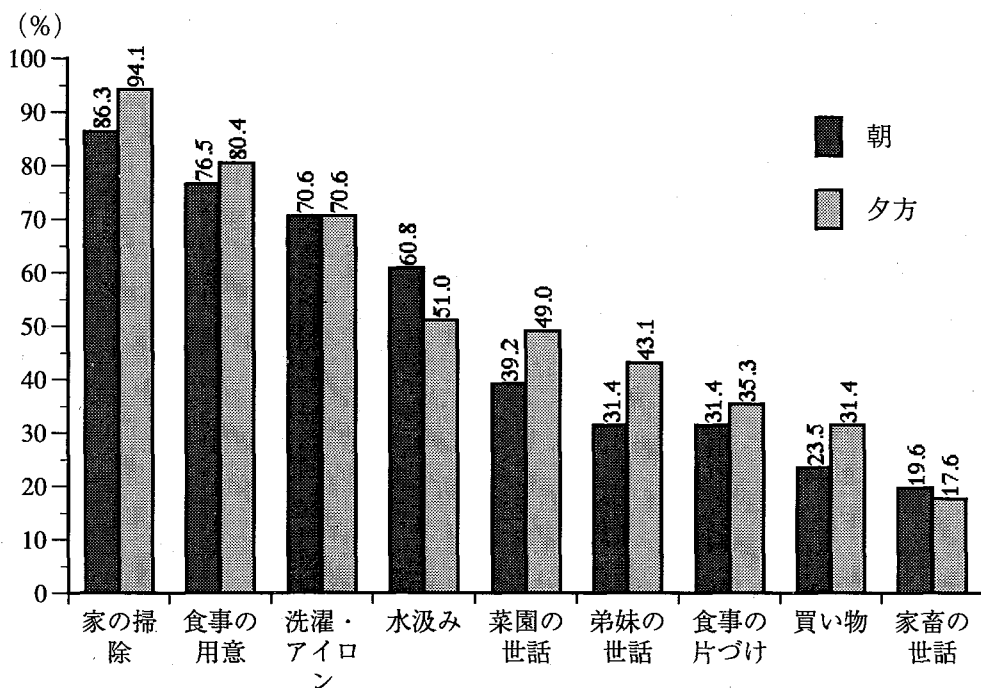


図5 ラーオ族女子13-15歳の家庭内労働

表3 就寝時刻, 起床時刻

		就寝時刻		起床時刻	
ラーオ族		平均	SD	平均	SD
男 11歳		21:15	56	5:53	45
子 14歳		20:51	77	5:37	46
女 11歳		21:55	43	6:02	50
子 14歳		22:04	63	5:41	32
カレン族		平均	SD	平均	SD
男 11歳		20:53	75	6:27	43
子 14歳		20:47	66	5:56	18
女 11歳		21:16	61	6:43	64
子 14歳		21:53	52	5:53	37

であり, わが国の例と比較するとはるかに朝の通学前の朝の時間帯が長いことになる。ちなみにタイの学校の第1時限目開始時刻は午前9時であり, 午前6時前に起床することは朝の時間が約3時間あることを意味する。最もカレン族の場合には通学にかかる時間がかかなり必要であり, 決してゆとりのある朝とはならないかもしれない。

2. 性差による役割文化

家庭内労働には性差による役割の分化が見られた。今回の調査で顕著に性差の認められた項目を表4に示した。両民族並びに両年齢集団に共通して完全にどちらかの性に優位な労働はなかった。一部の民族や年齢にのみに見られた場合には括弧内に明記した。その結果, 性差の現れ方には3つのパターンがあることが分かった。第一のパターンは中学生になってどちらかの性に優位になる労働である。このパターンには男子ではラーオ族の「家畜の世話」がある。ラーオ族の家畜は牛や水牛であり, 沢山の草を

必要とするために家から遠く離れた餌場まで家畜を連れて行き連れて返るとう労働が必要となる。遠くまでしかも力のいる仕事ということで中学生男子に最もよく課せられる労働ということになったものと推察される。一方中学生になって優位になった活動には「食事の用意」, 「食事の後片づけ」, 「水汲み」の3労働がある。「食事の用意」と「食事の後片づけ」はラーオ族とカレン族の両民族で顕著に女子優位となった。しかもこれらの労働は女子の実施率が増加するだけでなく同時に男子の増加率が減少するという傾向をとまっている。これらの食事に関する労働は母親つまり女性の労働であり, 加齢とともに調理の技術を身につけていくという家庭教育的側面があるものと解釈される。それは「しつけ」という言葉でも表現できるかもしれない。この結果は日本女子社会教育会が1994年に実施した「家庭教育に関する国際比較調査⁹⁾」の結果と同じ傾向を示している。この調査でタイの母親は「子どもが15歳の時に家族のために食事を作ることができるか」という質問に対して, 男子は66.7%女子では92.8%でできると回答しており, タイでは女子により多く食事関係のしつけをしていることが分かった。

また, ラーオ族の中学生では「水汲み」が女子に優位な活動となった。ラーオ族は平地に住んでいるため家の近くに井戸を持ち, 遠くまで出かけていって水を汲む必要がない。こうした家の周りで済ますことができる労働は女子に任されているという推測は成り立たないであろうか。しかし, 最近では電化にともなって電動ポンプの設置によって「水汲み」という労働が必

表4 性差の認められた家庭内労働

男子優位の労働	女子優位の労働
	食事の用意 (中学生)
	食事の後片づけ (中学生)
家畜の世話 (ラーオ中学生)	水汲み (ラーオ中学生)
買い物 (ラーオ・カレン中学生)	家内の掃除 (カレン・ラーオ中学生)
食事の用意 (カレン小学生)	弟妹の世話 (ラーオ小学生)

要なくなりつつあるのも事実である。

第二のパターンは殆どどちらかの性に優位になりそうでありながら小学校高学年時に完全に分化し得なかった集団を持つ労働である。男子の「買い物」がこれにあたる。ラーオ族では小・中学生の両年齢集団とも男子に優位な活動となっていたが、カレン族では中学生のみが男子に優位になり小学生では女子に優位な労働となった。しかし、中学生では完全に男子に優位な労働となっており、家の外へ出かけていくという活動は男子に優位な活動ではないかと推察される。特に集落の外へ買い物に出かけていくというような場合を考えると、身の安全という点では男子の方が外へ行かせるには都合がよいということになるのであろう。逆に女子に優位な労働では「家内の掃除」がこのパターンに属した。しかし、カレン族では小・中学生の両年齢集団で完全に女子が優位となったが、ラーオ族では小学校高学年生の朝の男子の実施率が若干女子を上回り完全に女子に優位な活動とはなり得なかった。しかし、これも先の例と同様中学生という点では両民族とも女子に優位な労働となっており、「家内の掃除」が女子に優位な労働となっている。このことは食事関連の労働と同様、家内で女性の活動として掃除が位置づき、加齢にともなって中学生の女子が母親の役割を代行する傾向が強まったためと解釈することはできないだろうか。

第三番目のパターンは先のふたつのパターンとは全く逆の傾向を示したものである。すなわち、小学校高学年生で性差が有意になり、中学校では性差がなくなるか若しくは性役割が逆転した労働である。男子に優位となった労働はカレン族での「食事の用意」であった。なぜこうなったかを説明できる理由を見つけられないのでここではコメントを控える。

女子に優位な活動となったのはラーオ族の「弟妹の世話」であった。特にラーオ族の場合小学校高学年生の女子の実施率は高く中学生になると性差がなくなってしまう。このことは他

の中学生で性差がはっきりとする労働とは全く傾向を異にする結果であり大変興味深い。この年齢差については次の節で詳しく検討する。何れにしても、育児が母親の労働となっていることから十分説明がつく結果である。ラーオ族では特に「弟妹の世話」は女子の役割となっていることが明らかとなった。

以上の結果は1990年に実施した調査結果と概ね同様の結果であった。

3. 年齢による役割文化

家庭内労働は加齢にともなってその実施率が変化する。特に変化の大きかった労働について図6に示した。

カレン族女子の朝の「食事の用意」を見ると11-12歳で低い割合を示したが、13歳すなわち中学生になると80%を超えて15-16歳では100%に達した。これはカレン族の女子にとって「食事の用意」が重要な家庭内労働となっていることを示す結果であると同時に、それ以下の年齢層と完全に役割を分担しているということを示唆している。また、カレン族の女子では8-10歳で11-12歳よりも高い割合を示したが、これは、13歳以上の姉たちを手伝っているか、あるいは興味をもって見ている集団であるとは解釈できないであろうか。本調査はボケオ村小・中学校児童生徒の悉皆調査ではあるが、山間地の学校で標本数が少なく、安定した数値を必ずしも得られておらず、この結果の解釈にはなお一層の継続調査が必要であろう。

ラーオ族男子の朝の「洗濯・アイロンがけ」の労働に顕著な加齢にともなった実施率の変化が見られた。ラーオ族女子の朝のこの活動にもかなり顕著な傾向が見られたが、男子の方がよりはっきりとした傾向であったのでここに示した。10歳の集団では実施率0%であるが11-12歳で30%前後となり、中学生となる13歳以上では60%を超える上昇傾向がみられた。10歳すなわち小学校4年生ではまだ自分で洗濯やアイロンがけを行っていないが、5年生くらいから自分で洗濯をするようになり、中学生になると多く

者が「洗濯やアイロンがけ」をするようになる。夕方の「洗濯・アイロンがけ」の実施率も高いのでこの労働が必ずしも朝に限った労働とはいえない。おそらく時間のあるときに洗濯をし、しまい込んで畳み、また必要に応じてアイロンをかけるのであろう。特にラーオ族の児童生徒は起床時間が早く朝にゆっくりと家事労働をするゆとりがあるため、朝の実施率が高くなっていると思われる。児童生徒が誰の服を洗っているのかという点では小学生でしかも上に兄弟のいる者は自分の物のみを洗っている場合が多いだろうが、中学生になると家族全員の分を洗っている場合も多いと思われる。また、中学生などが朝制服にアイロンをかけてから出かけていく様子はときどき見かけるほほえましい光景のひとつである。タイ国東北部の農村地域では、電気洗濯機を使用している家はまだ少

なく、殆どがブラシを使った手洗いである。子どもたちの着ている衣服を見るとよく使ってぼろぼろになっているものが多いが、学校の制服などはこまめに洗っていると見えて結構清潔な感じのする身なりの子どものたちも多い。ちなみにノーンガンホーイ村小学校の子どもたちの制服は同校で揃えた服ではなく、町の学校などから寄付されたお古の制服を着ている。

ラーオ族の男子の夕方の「家畜の世話」に顕著な加齢にともなう実施率の変化が見られた。10歳では実施率0%であるが、11歳から徐々に実施率が増大して14歳で57.1%に達した。14歳では約半数の物が何らかの形で家畜の世話を行っているという結果である。先にも述べたがこの村では牛や水牛を飼っている家が多く、男の子にとっては加齢にともなってその役割を少しずつ担うようになっている結果だと推察され

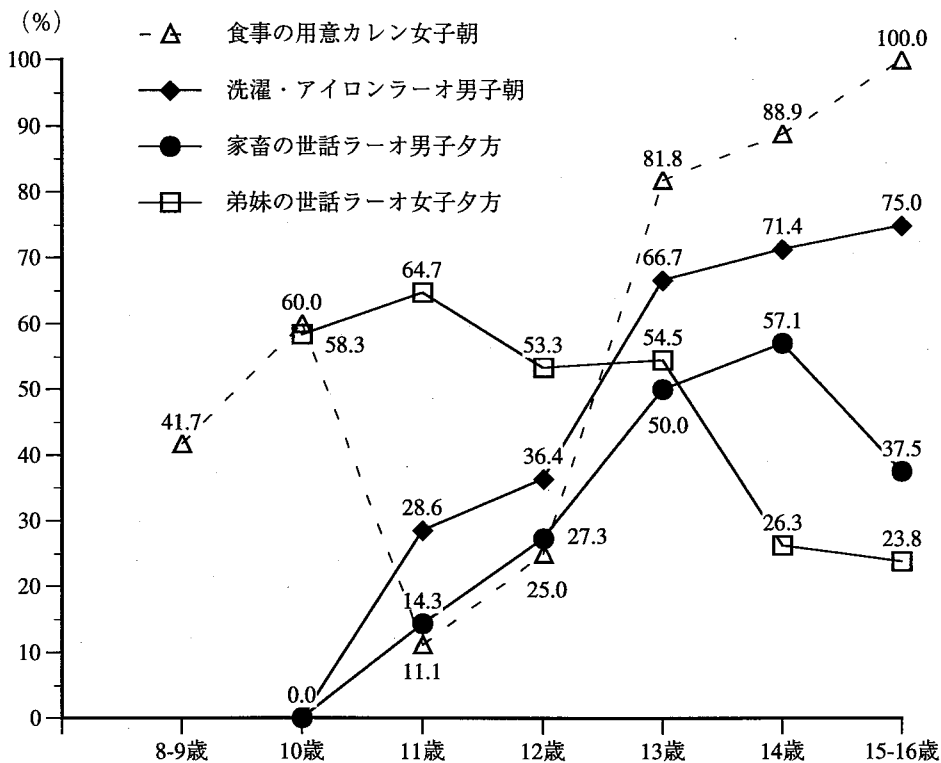


図6 年齢別にみた家庭内労働

る。

ラーオ族の女子では「弟妹の世話」が加齢とともに減少する傾向であった。朝夕とも同様の結果であったが、ここでは傾向の著しかった夕方の方の年齢による変化を示した。11歳の実施率が最も高く64.7%を示したが13歳までは50%代を維持し、14歳になると20%代となって15歳では23.8%と調査した年齢集団中で最も低い割合となった。このことは「弟妹の世話」がより年齢の近い者たちの役割労働となっていることを示唆している。最も兄弟の数に左右される役割分担である点を考慮しなければならないのであるが、下に弟妹のいる場合には更にその下の弟妹の世話は彼らに任せて、その役割から解放されると言えそうだ。しかし、先に見たように家庭内労働の数は加齢とともに増大しているのであるから、「弟妹の世話」から解放されたからといって家庭内労働が軽減されたというわけではもちろんない。最近では少なくなってきたが私が調査を始めた1980年代後半頃までは、学校に弟妹を連れてきている光景を教室の中で見ることがあった(写真3)。その時もっぱら下の子を連れてくる学年は小学校2・3年生くらいが多く、高学年生ではあまり見なかったように記憶している。さらに、放課後家の周りで幼児を抱き抱えている子にインタビューをした経験から

は小学校1年生や2年生が多かったようにも記憶している。しかし、こうした「弟妹の世話」は兄弟が多いからこそ生じる家庭内労働で、近い将来兄弟の数が大幅に減少するようなことになれば、兄姉が下の子の面倒をみていたものがわが国のように母親がすべてみるというように変化していくのかもしれない。

まとめにかえて

1990年の調査をベースにしながら、タイ国東北地域に生活するラーオ族と北部山岳地域に生活するカレン族の児童生徒の家庭内労働の1995年現在の状況を記録すること目的としてこの調査を実施した。農山村地域の学校は規模が小さく1校丸ごと調査をしても標本数が少なく安定した傾向を得るには至らなかったと感じている。また、質問紙による調査だけで得られた結果を説明することは困難であり、同時に聞き取り或いは観察による調査が必要であることは十分理解している。短い調査期間の間にこの調査だけに時間を費やしていることができなかったために、不十分な調査になってしまったことは承知している。この調査の結果を裏付ける追跡調査を行う予定にしている。特に、カレン族に対する調査はまだ始めたばかりであり、分からないことの方が多いのである。チャンスがあれ



写真3 弟妹を連れての授業

ば村内に寝泊まりして生の生活を体験する必要がある。したがって両民族の違いを比較検討することが十分にできなかった。今後の課題である。

タイ国の農村地域の生活は大きく変容している。それはいうまでもなく、都市的生活様式の浸透であり、かつて経験しなかった生活様式の変化が農村の人々の生活を伝統的生活から近代的生活へと変えさせようとしている。そうした変化の中で子どもたちの生活も大きく変わりつつある。学校という近代制度が子どもたちの生活時間の中心に据えられ、これまでの生活のリズムや役割労働は大きく変容したはずである。両親から学んでいた様々な生活技術が学校の教師から教えられる知識に置き換えられようとしているのである。それは農村で生きる知恵の教育から、タイ国民として生きる教育への転換である。新しい国民としての知識と技術が伝統的農民として生きる知識と技術を凌駕しようとしている。農村が経済的に豊かになり、都市的生活様式を十分に享受できるようになったとき、児童生徒の分担していた家庭内の役割労働そのものが減少し、家庭内労働の量と質が変容していくのであろう。

タイ国の表の顔はバンコク都であり、東南アジアを代表する経済発展のめざましい都市である。そこに暮らす人々の生活は先進諸国にかなり接近しつつある。しかし、タイ国の殆どの地域は農村地帯であり、都市部と農村部の格差はおそらくバンコク都と先進諸国との差よりも大きいかもしれない。その生活の様子は全く違う国であるかのような錯覚さえ感じるほどであ

る。都市の急激な発展にともなって農村の伝統文化は確実に姿を消しつつあるのもまた事実である。同一国内で起こるこうした発展する局面と衰退する局面を等しく捉え、総合的に分析することが必要である。タイという国家が近代国家へと変動していく過程を分析するとき、ここで取り上げているような人々の生活こそが重要な内容であると考えている。生活技術という地域性と民族性を持った文化の変容が、生活の近代化という時代の潮流の中で敏感に変容するひとつの指標であり、こうした生活時間の変化や家庭内労働の変化、さらには子どもたちの遊びの変容といった研究がタイという社会の理解に不可欠であると考えている。

文献

- 1) 佐川哲也・大澤清二(1992)：伝統的東北タイ農村における子どもの家庭内労働，大妻女子大学紀要一家政系一，28，259-269
- 2) 綾部恒雄(1971)：タイ族—その社会と文化，弘文堂，29-30
- 3) 上東輝夫(1983)：タイ社会を見る眼，原書房，93-96
- 4) タイ国内で発刊されている日刊紙「Bangkok Post」の天気予報欄(第3面)より引用した。
- 5) 大澤清二・佐川哲也(1992)：東北タイ伝統農村の子どもたちの生活時間からみた民族統計学，大妻女子大学紀要一家政系一，28，249-258
- 6) 財団法人日本女子教育会(1995)：平成5年度・6年度文部省委嘱事業 家庭教育に関する国際比較調査報告書—子どもと家庭生活についての調査一，財団法人日本女子教育会，89

表5 ラーオ族・カレン族の家庭内労働

朝の家庭内労働	ラーオ族				カレン族				
	男子		女子		男子		女子		
	年齢	10-12	13-15	10-12	13-15	8-12	13-16	8-12	13-16
食事の用意		50.0	51.9	47.7	76.5	43.5	26.7	34.9	88.0
食事の片づけ		20.0	3.7	22.7	31.4	17.4	6.7	23.3	32.0
家の掃除		66.7	63.0	63.6	86.3	30.4	60.0	46.5	84.0
洗濯・アイロン		26.7	70.4	25.0	70.6	0.0	6.7	2.3	8.0
買い物		26.7	33.3	15.9	23.5	4.3	40.0	20.9	24.0
店番		3.3	11.1	6.8	7.8	13.0	0.0	4.7	4.0
弟妹の世話		26.7	25.9	50.0	31.4	13.0	26.7	25.6	24.0
水汲み		53.3	44.4	47.7	60.8	39.1	66.7	46.5	64.0
家畜の世話		26.7	48.1	20.5	19.6	26.1	46.7	14.0	40.0
菜園の世話		20.0	40.7	31.8	39.2	0.0	6.7	2.3	0.0
その他		20.0	14.8	15.9	7.8	17.4	13.3	0.0	20.0

夕方の家庭内労働	男子				女子				
	男子		女子		男子		女子		
	年齢	10-12	13-15	10-12	13-15	8-12	13-16	8-12	13-16
食事の用意		53.3	44.4	36.4	80.4	43.5	53.3	34.9	76.0
食事の片づけ		26.7	7.4	27.3	51.0	13.0	13.3	7.0	28.0
家の掃除		56.7	66.7	81.8	94.1	39.1	53.3	58.1	60.0
洗濯・アイロン		30.0	66.7	22.7	49.0	4.3	6.7	11.6	24.0
買い物		30.0	40.7	15.9	17.6	8.7	40.0	16.3	20.0
店番		3.3	11.1	9.1	13.7	21.7	0.0	11.6	4.0
弟妹の世話		23.3	37.0	59.1	31.4	26.1	20.0	32.6	16.0
水汲み		60.0	48.1	47.7	70.6	30.4	80.0	46.5	72.0
家畜の世話		16.7	48.1	29.5	35.3	26.1	33.3	20.9	56.0
菜園の世話		23.3	25.9	22.7	43.1	4.3	13.3	0.0	0.0
その他		10.0	14.8	11.4	11.8	21.7	13.3	2.3	20.0